学校法人五島育英会 学校評価（自己評価）制度
2023 年度　実施計画書

学校名	東京都市大学等々力中学校・高等学校
校（園）長名	原田　豊

１．第 2 期事業計画期間の教育目標

(1)等々力中高改革の最後の仕上げと新たな大改革への準備という意識を明確に持って職務に当たる。
(2)五島慶太先生の熱誠とノブレス・オブリージュの教育を個々の教職員が教育活動全般に広く活用できるようにする。
(3)AL 活動はいわゆる「TOK」的な活動を ICT と関連付けて実践できるようにする。また、ロイロノートを中心としたアプリの熟達を図る。
(4)インターナショナル校や IB 校などと従来の枠を超えた交流やカリキュラムの交換などを大胆に模索し、本校の一層の飛躍の基盤を構築する。
(5)真の国際教育は「良き日本人の育成」であり、国語や伝統文化の教育の充実に向け具体的なプログラムを実践する。
(6)進学校の評価を盤石にすると同時に海外大学進学に向けた具体的な取り組みを実施する。
(7)良き教育は良き教員の育成でありそのための環境の改善と研修の充実を具体的に進める。

２．指標（目標）とする学校

①　ラグビー校

自律の精神、文武両道、フェアプレーとノブレス・オブリージュの精神等、本校の改革時以来の目標校

②　それぞれ地域の競合校、注目される改革実践校として意識している。その他の学校で目標としている学校はない。

３．第 2 期事業計画達成のための重点目標・重点課題及び 2025 年度達成目標

重点目標	重点課題及び 2025 年度達成目標
Ⅰ　良質な教育の実践	**①　魅力ある教育プログラムの開発・実践** 1. メタ認知能力向上が教育目標との意識が共有される。 2. ICT の活用による AL 授業が計画的に行われ、ルーブリック等の評価も完成している。 3. 発問の質の向上が図られている。 4. ポートフォリオ化が完成している。 5. 教科横断的授業が行われている。 **②　サポート体制の充実** 1. 国公立大学合格を基本とした進学指導体制の確立 2. 海外大学合格実績の向上 3. 質の高いキャリア教育の実施 4. 生活指導の質的向上 5. 防災安全指導の充実 **③　教職員の人材育成・資質向上** 1. 計画的な教員研修の実施 2. いじめ対策の等々力スタイルが完成している。 3. 発達障害や自傷自殺予防に関する指導の等々力スタイルが完成している。 **④-1　ICT を利用した教育計画** 1. 生徒カルテの作成

	2. クラウド等のシステムの活用 3. e-ポートフォリオの完成 4. ICT を利用した新しい学習支援システムの構築 **④-2　国際化計画** 1. 現在の８種の国際交流事業の促進 2. 新規交流事業の促進
Ⅱ　グループ間連携の深化・拡大	**各学校の連携強化** 1. 都市大学生の支援要請 2. 文化講演会の講師依頼
Ⅲ　教育環境の整備・充実	**学習環境の整備・充実** 1. 等々力プロジェクトでの討議 **効率的業務の推進** 1. 教務支援員の活用促進 2. 部活動支援員の活用模索

４．本年度の施策内容（達成目標）及び具体的な取り組み内容

重点目標Ⅰ　良質な教育の実践		
重点課題①　魅力ある教育プログラムの開発・実践		
本年度の施策内容（達成目標）	**具体的な取り組み内容**	**評価の観点**
①等々力第４回 ICT フェアの開催 ②ロイロ認定教員の倍増 ③模擬国連活動の推進	[ICT 推進委] ①TOK 的な解のない問い、反転授業、ジグソーなど、「深い学びと ICT」をテーマに実施計画を早期に決める。 ②ロイロ認定校の指定を受け、昨年度に続きさらに 15 名の認定教師を輩出する。その効果を分かり易く広報する。 [模擬国連活動委] ③大妻大会（6 月）、AJEMUN(8 月)、全日本大会（秋）、渋幕大会(3 月）に参加する。 AJEMUN での受賞,全日本大会の本選出場を目指す。 過去の模擬国連大会出場者数の推移を提示する。 学年や国際教育室と調整して、S 特や帰国生のαクラスの生徒の集会を開き、模擬国連の意義等を強調する。	[ICT 推進委] ①ICT フェアが計画通りに開催できた。また概要を冊子化し、予算措置ができれば広報に使う。ビデオ化も考える。 ②ロイロ認定教師の追加承認が目標数に達した。 [模擬国連活動委] ③-1 目標通りに各大会に参加できた。 ③-2 AJEMUN で受賞し、全日本大会の本選に出場できた。 ③-3 具体的に、どのような工夫・取り組みを実施したかを示す。概要を広報用に冊子化することも考える。
重点課題②　サポート体制の充実		
本年度の施策内容（達成目標）	**具体的な取り組み内容**	**評価の観点**
①英語４技能強化に向けたインディゴ研修及び新たなアプリの検討	[国際教育室] ①-1 インディゴ研修：23 年から計画を動かしていく。(ただし、今後もコロナの影響による) [学習支援Ｓ委・学年会] ①-2 新アプリ mikan を導入する。4 月に各学年の実施要項を配信し円滑な運営を図る。新システムの	[国際教育室] ①-1 プログラムの実施。実施後は参加者によるアンケートを行いプログラムの検証を行う。

	ため合格点の変更など柔軟に対応する。スタディサプリ English もシステムＺに組み込み、4 技能を強化する。目標英検級の取得率を数値化する。	［学習支援Ｓ委・学年会］ ①-2 早期に目標値を設定する。昨年度の取得率から 5%～10%高で設定する。
②防災・安全に関する教員研修計画・生徒教育計画の策定	［行事委］ ②校舎の構造上の特徴等を法人の関係部署と相談しながら、防災・安全対策を再考する。また、各種マニュアルを周知する。	［行事委］ ②各種マニュアルの周知の状況による。
重点課題③　教職員の人材育成・資質向上		
本年度の施策内容（達成目標）	**具体的な取り組み内容**	**評価の観点**
①いじめ対応に関するスキルの向上	［生徒活動委・学年会］ ①学年団による組織的な対応により早期の発見を徹底し、状況の確認や周囲への事実確認から当事者への聞き取り・処置まで迅速でなければならないことを徹底する。	［生徒活動委・学年会］ ①学年団による組織的な対応により、いじめ問題が解決できている。
②発達障害傾向の生徒に対する対応能力の向上	②-1 ソーシャルスキルトレーニング(SST)の取り組みなどを検討し研修等の具体的な施策を講じる。 ②-2「ひだまり」(本校カウンセリングルーム)の校内巡回を実施し発達障害傾向の生徒を早期に発見し、組織的な対応を考える。	②発達障害傾向の生徒に向けた適切な支援方法に関する配信が適切に行われた。SST の手法が紹介され多くの教員に共有されている。巡回が適宜行われている。
	①②生徒活動委員会において、懸案の本校事例集を作成する。各学年の①②に相当する事件の報告の際に、問題行動報告書の簡易版を作成し、それによって報告させる。事例を積み上げていくことこそ教員生徒指導力の向上に直接につながる。	①②本校の事例集ができた。
③ＩＣＴの活用の深化	［教育管理委・ICT 推進委］ ③-1 第 4 回 ICT フェアによって定着を確実にする。ICT の活用が「深い学び」に繋がっていることを各教員の視点で審査する。(ICT を活用したことで生徒がどう変わったかという視点の考察をする。)また、ロイロ認定教師を新たに 15 名輩出する。(再掲)	［教育管理委・ICT 推進委］ ③第 4 回 ICT フェアにおいて全教員がその準備及び模擬授業などを経て、昨年度より「深い学び」への言及がある。 ロイロ認定教師が目標数に達した。(再掲)
	③-2 ロイロ等の研修及び ICT 授業の公開化を積極的に呼びかける。	③-2 研修及び活動計画を提示し、その通りに実施する。また、小冊子化を考えて報告する。

重点課題④－１　ICT を利用した教育計画		
本年度の施策内容（達成目標）	具体的な取り組み内容	評価の観点
①システムＺの活用の充実

③部活動の練習に都市大の学生による指導が多くの部活動で行われている。	［生徒活動委］ ③弓道部、男子バスケ部では継続した指導を実践していく。他の部活動への波及を今後も探っていく。	［生徒活動委］ 都市大の学生による指導が継続されている。
重点目標Ⅲ　教育環境の整備・充実		
重点課題　学習環境の整備・充実		
本年度の施策内容（達成目標）	**具体的な取り組み内容**	**評価の観点**
①施設設備の整備に向けた検討	①法人と連携しつつ、時期を考えて広範な教職員の意見をまとめながら進めていく。	法人と連携しつつ、教職員の意見をまとめながら検討する。
重点課題　効率的業務の推進		
本年度の施策内容（達成目標）	**具体的な取り組み内容**	**評価の観点**
①教務支援員の継続配置 ②部活動支援員配置に向けた取り組みの推進 ③生徒カルテ（仮称）の仮モデル作成	［教頭・学年部長］ ①継続して配置していく。 ②部活動支援員に関する業務内容、生徒への指導内容、教員との関係性などの要項を作成する。 希望部活動の選定を継続する。 ［ICT 総合戦略室］ ③生徒カルテ（仮称）の仮モデルが校長に提示できている状況を作っていく。	［教頭・学年長］ ①教務支援員のとりまとめと業務の効率化の達成や教員の省力化に貢献できた。 ②新規立ち上げの部活動指導員について要項作成・業務内容や部活動との関わりについて確立できた。 ［ICT 総合戦略室］ ③生徒カルテ（原案）が策定され、教員の使い方に関する検討が反映できた。
募集広報活動		
本年度の施策内容（達成目標）	**具体的な取り組み内容**	**評価の観点**
①広報戦略 ②実受験者数 ③サテライト戦略	［入試管理委］ ①-1 大手塾の保護者訪問会を再開する。 ①-2 大学進学実績を大きくアピールする。また、ICT フェア、模擬国連、自習室、研究論文、授業公開のまとめ、GL 講座など広報活動を再度検討し、6 月までに計画を提示する。 ②1,809 名(2019 年度)/1,811 名(2020 年度)⇒1,804 名(2023 年)のため 2024 年度は実受験者 2,000 名を目指す。 ③昨年度の説明会参加者のデータを作成し分析。更に地域拡大のため一部会場変更を行う(三田か新橋いずれかを追加する)。	［入試管理委］ ①-1 四谷大塚・SAPIX 等の対面での保護者訪問会が実施された。 ①-2 大学進学実績を大学通信・各塾受験雑誌ほかで有効にアピールできた。 ②実受験者 2,000 名を達成した。 ③サテライト説明会を三田または新橋を追加して実施した。
進路指導		
本年度の施策内容（達成目標）	**具体的な取り組み内容**	**評価の観点**
①国公立 88 旧帝大レベルで 10、首都圏で	［学習・進路委］ ・進路部長が毎回、高３学年会に出席する。	［学習・進路委］ ・達成目標の①②③

40 ②早慶上理 ICU で 155(早慶で 50) ③GMARCHで 460	・適時、進路集会を実施する。例えば、4 月のオリエンテーション期間に全体会、１学期中にコース別集会、夏季休業前に全体会を実施する。2 学期も 10 月模試の直前、2 学期末に、更に 3 学期初にも全体会を実施する。 ・学年全体の目標数値を、各クラスの目標数値に落とし込む。その上で進路部長と各担任との出願マッチング面談（クラス目標数に対する戦術の確認）を 5 月に、また、共通テスト後の国公立出願時（1 月 18 日）に出願マッチング会議（各生徒の国公立大学の出願先を、高 3 学年全員で検討する学年会議）を実施する。	は、ともに目標の数値を達成できた。 ・進路集会は、計画通りに実施できた。 ・出願マッチング面談や会議を、計画した時期に、計画した内容で実施できた。
その他学校目標		
学校課題　充実した学級経営と主体的な学年部長のリーダーシップ		
本年度の施策内容（達成目標）	**具体的な取り組み内容**	**評価の観点**
[学年別指導プログラム] ①アサーティブな人間関係構築のための指導	**[中学１年]** ①-1 1 学期の LiP で 3 回にわたりアサーション・トレーニングを行う。 ①-2 行事を活用し、行事を行う際は「目的」だけでなく、その行事でどのような集団に昇華させるかの「目標」をたてさせる。また、行事推進のリーダーは常にアサーティブな関係を意識させ行動させる。具体的なリーダー指導を学年会で共有・徹底させる。	**[中学１年]** ①スポーツ大会、藍桐祭、合唱コンクールにて「目標」を各クラスで設定し、振り返りまで行う。簡潔な目標から経過・振り返りまでのシートを作成し、各行事のリーダーに配付し提出を求める。
②メタ認知能力向上のための指導	②-1 生徒指導を通じ、生徒をどのように成長させていくかのゴールイメージを持つ。行ったことを自ら振り返りをさせ、教師との問答法により内省し、気づきを与え行動に移させる。 ②-2 TQ ノート・逆算 TQ を活用し、ゴールに対し計画を立て、進捗を確認し、成果から振り返り、何が良かったのか、悪かったのかを導き出し、次に向かう戦略を立て自ら行動させる。	②毎日 TQ ノートを回収しコメントを付すことで全員のメタ認知能力を向上させる。担任差を僅少化するため、コメントの視点(肯定と質問、気づきを誘う問いかけなど)を提示する。 ①②について、道徳・探求・LiP のテキストを担任のそれぞれの教科の実践例によって作成する。それをもって進捗状況が確認できる。
③その他の生徒活動の学年独自施策(発達障害・いじめ対応・ボランティアなどを含む)	③HR 経営の『学級集団づくりのゼロ段階』を学年会で説明し、理想の学級集団の状態と目安を学年で共有する。	③4 月当初の学年会で解説し担任間の目線合わせを行う。
④スタディサプリの活用のための指導 ア. 再指導の形式 イ. 到達度テスト	④-ア スタディサプリの「宿題配信専用講座」を配信して取り組ませ、再指導当日には単元テストを実施して「できる」にさせる。 ④-イ 弱点分析を行い、生徒には「連動型課題」を配	④再指導は学期 3 回実施し、学習コーチングの形態で自己肯定感を高める指導を

ウ.スタサプＥの活用 エ.進学実績向上のための具体策	信し、積み残しの解消を図る。さらに３学期の再指導に活用していく。	徹底する。講座・課題については管理者は取り組み状況を把握し、随時確認し都度生徒を指導する。
⑤mikan 活用のための指導	⑤-1 英検取得が大学入試で有利になることを中１の時から指導していく。 ⑤-2 毎週火曜日にテストを実施し、毎日英単語の学習を行う「習慣づけ」と「覚えきる学び」を徹底する。 ⑤-3 コーチングでは、英語学習の時間を設け再テストを実施。TQ ノートを使用し、mikan の学習習慣を確立させる。	⑤英検４級取得を70％達成できた。
⑥自習室利用促進に向けた指導	⑥4/17～4/19 の 3 日間で全員に自習室の利用法を指導し、利用させる。また月別の利用データを活かし、利用促進を図る。	⑥利用者データを教室掲示し利用促進を強化する。
⑦ポートフォリオ計画	⑦逆算 TQ で振り返りをした内容を、ポートフォリオに記録させ、次の定期考査に活用させる。	⑦ポートフォリオの担当者を決め、定期考査終了後の入力、ルーティン化させる。
⑧その他の学習・進路指導の学年独自施策(研究論文・対外コンテスト参加促進などを含む)	⑧-1　４Aplus を学期３回実施し、授業内容の理解度を計り、未到達の領域があればすぐに解決を図っていく。 ⑧-2 定期考査の３週間前に「範囲表」と逆算ＴＱを配布し、定期考査に対する取り組みへの早期の意識づけを図っていく。	⑧成績下位層への指導を行い、GTZ におけるＣ層以下の生徒を5%以下にする。
［学年別指導プログラム］ ①アサーティブな人間関係構築のための指導	［中学２年］ ①昨年の「人権・差別」に関する「道徳」の授業を、今年は、「命」に関する学びに絡め、関連動画の視聴や各種資料を用いてＡＬの授業を実施する。 春季課題に「自分史作成」を取り入れ、ここまでの歩みを振り返らせることで、まず「自分を大切にすること」、ひいては学校行事の「自己発見と共生の旅」を通じて「他者を大切にすること」に気づかせていく。	［中学２年］ ①②自他を尊重する道徳観を「共生の旅」のプレゼンを通して判断する。また、道徳・探求・LiＰの年間計画を明示し、組織的な教育・指導を実践して効果を図る。評価は日頃から担任等と情報を交換しておく。
②メタ認知能力向上のための指導	②ＴＱノートの習慣化から、「中期的なＴＱ」（逆算ＴＱ）をたてさせる段階へと移行させ、記入したものを学びの向上へと繋げるレベルに進化させる。そのために、ノートの指導とチェックを強化し、マンダラートなどを駆使して、中長期計画の策定とその遂行（目標設定と進捗管理など）などの指導を行う。	②逆算ＴＱとは別に考査前にシートを配付し、目標や振り返りを重視する形式のシートにする。その記載内容の質的向上の程度を診断する。
③その他の生徒活動の学年独自施策(発達障害・いじめ対応・ボランティアなどを含む)	③-1 発達障害の生徒の絡むトラブルには、「『ひだまり』と連係→保護者と情報共有→対処法→教員間で共有」をルーティン化し、スピード感をもって対応	③多様化するトラブルの原因と生徒の資質に教員団が理解を

	する。 ③-2 学年を超えた生徒活動委員会で学年の問題発生の事例を随時一定の書式で報告し、全校の問題発生事例集を積み上げていく動きを示す。 ③-3 ボランティア活動は、行事委がClassiに紹介されている「課外活動」から、中学段階で推奨できるものをピックアップしてこまめに紹介し、必要に応じて年度末に表彰する。 ③-4 家族の中での役割を考えさせる「ワークシェア」も継続し、クラスや学校の中における自らの役割へと視点を広げさせていく。	深め、報・連・相の徹底を評価する。また、教員の指導のレベルの向上とそれに伴う負担感の軽減に資するための事例集を作成する。その端緒を残す。
④スタディサプリの活用のための指導 ア.再指導の形式 イ.到達度テスト ウ.スタサプEの活用 エ.進学実績向上のための具体策	④ア 昨年の「再指導」は、教科担当による指定者への講義（授業）という形を取ったが、そこに加え、弱点補強のためのスタディサプリ視聴を導入する。 イ 年数回おこなう「到達度テスト」の結果をふまえ、連動課題の視聴を「長期休業中の取り組み」の一つに加える。 ウ 昨年同様、スタサプEを「長期休業中の取り組み」の一つとして活用し、アナライズセンターと連係して優秀者は表彰するシステムを継続する。 エ 1st ステージでは高い能力を持った学年生徒集団を、一人の落伍者も出さず、なお一層のボトムアップを図る。具体的には、英数国のGTZ Bランク層ゼロ（＝全員Aランク以上）という高い目標を達成したい。そのための効果的な施策を学年会で適時に検討し、随時実践していく。具体的な施策は生徒の成績や成績分布、自習力の状況等を分析しながら5月以降に具体化する。	④上位層が大きな理想を持って、学びにより主体的に取り組めるようになる。他方、中下位層が、苦手意識やつまずきを解消、学年全体が一つの集団として意欲的に臨むことができるようになる。（まずS特選の英数国GTZ Bランク層ゼロを目標とする。）
⑤mikan活用のための指導	⑤朝の教室環境の規律を調え、mikanへの真剣な取り組みを促す。	⑤英検3級の合格率85%を目標とする。
⑥自習室利用促進に向けた指導	⑥利用をあらゆる機会に促す。年度末にはアナライズセンターと連係して、利用回数上位者を表彰する。利用回数が1桁台にとどまった生徒の学習状況を学年で注視していく。	⑥学年全体で自習室を有効活用できる集団になっている。
⑦ポートフォリオ計画	⑦学校行事のみならず、「学年の取り組み」に関しても、ポートフォリオを作成させ、日常的に振り返りをおこなう学年を目指す。ポートフォリオを使って、「よりふさわしい語彙を選ぶ力」「より伝わりやすい文章を作る力」をつけることを意識させる。	⑦学年においてポートフォリオを活用できている。
⑧その他の学習・進路指導の学年独自施策(研究論文・対外コンテスト参加促進などを含む)	⑧-1 ボキャコンを定期的に実施する。また、新たに古文単語、現代文単語についても導入する。 ⑧-2 「課題提出状況」の個票を作成、未提出・不備が多い生徒には保護者にも改善を促していく。	⑧-1 3種類の学年統一のテストの実施結果を報告する。 ⑧-2 実施結果を報告する。
［学年別指導プログラム］ ①アサーティブな人間関係構築のための指導	**［中学3年］** ①、②、③について これまでの指導を前提に、今年度はリフレクション	**［中3学年］** ①②③TQノートで日々のリフレクショ

②メタ認知能力向上のための指導 ③その他の生徒活動の学年独自施策(発達障害・いじめ対応・ボランティアなどを含む)	に焦点をあてる。リフレクションでは「認知の4点セット」を活用する。人の「意見」の背景には、その人の固有の「経験」や「感情」や「価値観」というものが存在し、この4点を内的に照射することで、自己理解も他者理解も深まるという。このリフレクションを習得させることで、相手の感情についても俯瞰して理解できることを目指す。具体的には、ステージアップ合宿で認知の4点セットのスキルを学ぶ。HR面談でもこの4点セットを意識した振り返りを実施する。また、まず学年の教員団の理解と共感を得る。	ンの変化を期待するが、まずは、行事後のポートフォリオと面談で確認する。年間3回の面談の結果（認知の4点セットの使用）は、学期最後の学年会議で担任より報告させ、その状況を学年内で共有する。
④スタディサプリの活用のための指導 ア.再指導の形式 イ.到達度テスト ウ.スタサプEの活用 エ.進学実績向上のための具体策	④到達度テストと再指導を連動させる。 6月到達度テスト→1学期再指導 1月到達度テスト→3学期再指導 再指導は、スタサプ視聴と教科の指導、面談の3つを同時に行う。アナライズセンターの協力も得る。	④連動型再指導が年に2回実施されている。スタサプ視聴が20名以内、教科の指導が40名程度を目標とする。下位二番手層への教員の指導が年間通して継続されている状況をつくる。
⑤自習室利用促進に向けた指導	⑤teamsを利用したオンライン自習室を継続する。	⑤継続できたかを目標とする。
⑥ポートフォリオ計画	⑥スポ大、藍桐祭、合唱コン、修学旅行、LiP大会で行う。定型文主体から自由記述を増やす方向へ進める。	⑥認知の4点セットによる振り返りの要素も含まれているものになっているか。この行事以外にもポートフォリオを実施し、年間7回以上、振り返りの機会を与える。また、担任はその提出状況およびその内容を確認する。
⑦その他の学習・進路指導の学年独自施策(研究論文・対外コンテスト参加促進などを含む)	⑦医学部進学の卒業生を集めて、「等々力流医学部受験のすすめ(仮)」の実現を目指す。	⑦2学期以降に実施、他学年生徒も参加できる企画にする。今年度は、等々力生として医学部受験することのイメージを持つことを目的とし、実際の志望者数増加は次年度以降の目標とする。
［学年別指導プログラム］ ①アサーティブな人間関係構築のための指導	［高校1年］ ①藍桐祭での活用の場合、準備前に「実施の目的」だけでなく、藍桐祭後にクラスをどのように変化させたいか「目標」をたてさせる。クラス内に複数のグ	［高校1年］ ①藍桐祭の「目的」と「目標」を各クラスで設定し振り返り

	ループ（役割）を作り、リーダー、フォロワーともにアサーティブな関係を意識させ行動させる。具体的なリーダー指導を学年会で共有・徹底させる。	まで行う。簡潔な目標から経過・振り返りまでのシートを作成し、各行事のリーダーに配付し提出を求める。
②メタ認知能力向上のための指導	②-1 日々の生徒対応の際は常に生徒をどのように成長させていくかのゴールイメージを持つ。教員との対話により「振り返り」→「内省」→「気づき」→「行動変容」させる。そのために、TQ ノーの意義を再確認する。 ②-2 逆算 TQ シートを活用し、ゴールに対し計画を立て、進捗を確認し、成果から振り返り、何が良かったのか、悪かったのかを導き出し、次に向かう戦略を立て自ら行動させる。	②毎日 TQ ノートを回収し、コメントや記載状況を基にした面談を通じてメタ認知能力を向上させる。担任差を僅少化するため、コメントの視点(肯定と質問、気づきを誘う問いかけなど)を提示する。また、考査前 3 週間に逆算 TQ シートを作成・配付し、ゴールに対する振り返りの便宜を図る。
③その他の生徒活動の学年独自施策(発達障害・いじめ対応・ボランティアなどを含む)	③ボランティアをはじめ他流試合の紹介を Teams で生徒に配信およびオープンスペースに掲示。積極的な参加を促す。紹介は『GW 前・夏・冬・春季休業前』を目途に行う。紹介内容は「研究論文」のフィールドワークと紐づくことも意識する。	③生徒の参加率 30%を達成できた。
④スタディサプリの活用のための指導 ア. 再指導の形式 イ. 到達度テスト ウ. スタサプ E の活用 エ. 進学実績向上のための具体策	④朝の数学小テストの再復習のための「数学確認テスト」を考査 2 週間程度前に実施し、不合格者にはスタディサプリの視聴講座を作成し視聴させる。 ④-ウ 週 4 回の朝 10 分のスタサプ E の取り組みを徹底するために、教室への入室は 8：25 を目安で入室し、全員が落ち着いた形で 8：30 を迎えられるようにする。	④各考査前のコーチング対象は学年の 15%以下とする。
⑤自習室利用促進に向けた指導	⑤毎月の利用データを学年教員に共有。HR や面談の際に利用促進の話題として活用する。	⑤全校の使用率のうち高 1 が占める割合を 20%以上とする。
⑥ポートフォリオ計画	⑥学年で行事を中心に『年間ポートフォリオ計画』を作成。計画の進捗を管理する。	⑥ポートフォリオの担当者を決め、行事後の入力をルーティン化させる。
⑦その他の学習・進路指導の学年独自施策(研究論文・対外コンテスト参加促進などを含む)	⑦-1 定期考査の 3 週間前に「範囲表」と逆算ＴＱを配布し、定期考査に対する取り組みへの早期の意識づけを図っていく。 ⑦-2 研究論文ではトモノカイと連携。ワークシートの作り込み、オンラインメンタリング、メンターセッションなどを通じて論文を完成へと導く。 ⑦-3 GL クラスではユネスコとの連携事業『アートマ	⑦-1 GTZ における S3 以上の生徒を 30%以上。A3 以下の生徒を 20%以下にする。 ⑦-2 取り組んだ全生徒が論文完成。事後のアンケートで満足度 80%超えを達成する。 ⑦-3 事後アンケート

	イル』を実施。ユネスコや合同で実施するベルギーとの学校間連携を密にとり社会問題解決に向けた国際的視点を養うことでグローバルリーダー育成の一助とする。	で満足度 80%超えを達成する。
［学年別指導プログラム］ ①アサーティブな人間関係構築のための指導 ②メタ認知能力向上のための指導 ③その他の生徒活動の学年独自施策(発達障害・いじめ対応・ボランティアなどを含む) ④スタディサプリの活用のための指導 ア. 再指導の形式 イ. 到達度テスト ウ. スタサプＥの活用 エ. 進学実績向上のための具体策 ⑤自習室利用促進に向けた指導 ⑥ポートフォリオ計画 ⑦その他の学習・進路指導の学年独自施策(研究論文・対外コンテスト参加促進などを含む)	［高校２年］ ①-1　アサーティブな人間関係の構築のために日頃から全ての事象に対し、「言った責任と言わなかった責任」の両面を意識させる指導をしていく。 ②校内で行われる取り組みに対し、都度ポートフォリオに記録として残させる。概ね月に１回程度を目途とする。考査の振り返りは別途ロイロを使って行う。また日々の学習、生活に対する振り返りとしてＴＱノートの毎日の記入と確認を実践していく。 ③コロナ規制の緩和により対外ボランティア活動を進めていく。ボランティア情報を学年掲示板に投稿することで活動意欲を刺激し活動機会を増やしていく。 ④スタディサプリは、大まかな取り組み目標を立てて生徒に周知する。課題や提出課題とはしない。生徒各自が自学自習用として活用できるように誘導する。 ⑤昨年度の進路実績と自習室利用率の相関関係を示し、生徒へ周知することで、自習室利用率を上げる仕掛けを作る。 ⑥各行事や生徒の取り組み毎に課題配信しポートフォリオへ落とし込みをさせる。またそれ以外でも自分の活動について自由記述を呼び掛けていく。 ⑦-1 学びあいチャレンジ塾の実施 昨年に引き続き今年度は５科目に広げ、放課後週１～2 回実施予定。問題提供はするが、あくまでも生徒の主体的な学びあいを大切に運営する。 ⑦-2 研究論文の文集化 1 年かけて書き上げた研究論文を冊子にまとめ、広報活動にいかされるようなものとなっている。	［高校２年］ ①クラスでの決め事の場面でこれらのことを意識して全員が考えを言い合えるようになっている。 ②担任が毎日 TQ ノートを確認できている。ポートフォリオ課題を全員が提出できている。 ③各クラス 5～10 名のボランティア活動者がいる。 ④年間を通して生徒が自学自習教材として活用できている。 ⑤2022 年度の利用率より 20%増えている。 ⑥課題ポートフォリオは全員が提出できている。自由記述をする生徒がいる。 ⑦-1 学び合いチャレンジ塾は予定回数実施できている。 ⑦-2 生徒用論文集の他に広報活動用の論文ができている。
［学年別指導プログラム］ ①メタ認知能力向上のための指導 ②自習室利用促進に向けた指導	［高校３年］ ①担任による進路面談は反転面談（生徒による進路計画のプレゼン）とする。志望大学・学部・志望理由(キャリアビジョン)・難易度・現在の自分の偏差値・その差を埋める方法(何をどうやって)等の内容を含むビジョンを説明する。教師・保護者は聞く側に回り、従来の面談のあり方を反転させる。三者面談では保護者の前で生徒に語らせる。 ②自学自習力こそ合格実績向上のポイントであり、議	［高校３年］ ①反転面談が各生徒につき１回以上実施されている。 ②③アナライズ面

③その他の学習・進路指導の学年独自施策	論や話し合う空気が新傾向の考える問題への対策となることを強く訴える。自習室利用状況のポートフォリオで可視化し適宜利用を促す。また、自習室過去問特設ブースなどの企画を提案していく。 ③-1 生徒のニーズに合った講座（放課後特訓講座、夏季・冬季登校講座、Ａ・Ｂ・Ｃターム）を早い段階で具体的に計画し、告知する。学年の進学実績目標値達成のもとに戦略的にターゲットを絞った魅力ある講座内容を提示する。 ③-2 特訓講座や本校主催の各種進学講座への参加率の目標値を 80%とする。少なくとも昨年度実績レベルは維持する。 ③-3 アナライズ面談を実施し、特に下位者対策として基礎力充実のスタサプ視聴課題を提示するか、視聴のための講座を開くかする。アナライズセンターと相談し最大 60 名までは実施可能とする。	談、ポートフォリオ、自習室過去問特設ブースの実施状況による。 ③講座計画の告知の状況による。